連載⑫ 白田一敏

困った時は、鶏に聞け！

いざ、ワクチン投与

世の中には『取扱説明書』なるものが存在する。マニュアルで管理することが良しとされる社会風潮の影響か、あるいは製造物責任法（ＰＬ法）の影響なのか否かは不明だが、とにかくその数に限りない。なかには、辞書並みの厚さを誇るものすらある。

そんな取扱説明書だが、困った時を除けば、ほとんど読むことがないのは筆者だけではないだろう。

鶏用の市販ワクチンにも御多分にもれず、取扱説明書が同封されている。そこには、製品内容、使用、取扱い、保管上の注意や有効期間などが記載されている。

改めて見直すと、結構詳細に説明されている。筆者の経験からすると、熟読するに越したことはないが、これまで本連載で紹介した『鶏の立場になって考えること』、『微生物の特性』、『ワクチンの長短所』などの基本原則を覚えておけば、失敗が少ないはずだ。

仮に、説明書通りに実践しても、すべての仕事が円滑に進まないのが、生き物が相手の現場といえる。

本当に必要なノウハウは、各々の生産現場で培われた経験の集積であり、説明書には記載されていないことが多い。行間に隠れているのである。具体例を上げて紹介してみよう。

例えば、ワクチンの接種方法には、次のような方法がある。

1）飲水接種（生ワクチン）
2）噴霧接種（生ワクチン）
3）点眼・点鼻接種（生ワクチン）
4）筋肉内接種（生・不活化）
5）皮下接種（生・不活化）
6）穿刺接種（生ワクチン）
7）塗擦接種（生ワクチン）
8）卵内接種（生ワクチン）

農場現場において実施頻度が最も多い接種方法は、飲水接種であるので、この方法について取り上げる。

ある生ワクチンの説明書には、飲水接種時の主な注意事項として、

一）飲水量に関する記述
二）使用する水に関する記述
三）薬剤混入に関する記述
四）給水器の設置（均等に飲水）
五）投与前の断水や投与時間

などが説明されている。

最初の四項目は、ワクチンウイルスの特徴に基づく取扱いやワクチンの長短所が考慮されたものである。

ちょっとしたノウハウが必要な項目は、投与前の断水や投与時間に関する内容である。単純に給水を二、三時間止めて、ワクチンを飲水投与すればＯＫという話ではない。現場の条件は多種多様である。

例えば…

①給水方式がピック式の場合、断水後の給水開始時に、排水側の水位を確認するだけで良いのか？

②ドスマチックやドサトロンといった自動添加機を用いる場合は、どういった工夫が必要か？

③猛暑時だったら、断水しても良いのか？

④飲水投与自体が実施しにくい設備の場合は、どうすれば良いのか？

いざ、ワクチンの投与作業を行う際に、さまざまな疑問が浮かんでくるものだ。

こういった時は、『鶏の立場で』考えることを基本原則として、『鶏舎設備の特徴も充分に把握』する必要がある。

ピック式は断水させるとエアをかむ箇所があるので、断水後きちんとすべてのピックから水が出るか否かの確認作業が必要だとか、あるいは、添加機を用いる時は、ビタミン剤などで水を色付けするなど、ちょっとした観察や工夫が、ワクチン投与の効率・効果に大きく影響してくる。

その他にも現場の知恵がいくつもあり、それらの追求への熱意に敬意を表するものである。

今回のひと言…

ワクチン投与には、鶏舎設備の特徴を考慮して工夫を重ねよう！

㈱ピーピーキューシー研究所（獣医学博士／獣医師）